

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

スペイン内戦とイギリス人の反応

著者	川成 洋
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．人文科学編
巻	109
ページ	19-48
発行年	1999-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/3722

スペイン内戦とイギリス人の反応

川 成 洋

1 スペイン内戦の「原風景」

スペイン内戦が勃発した1936年といえば、日本では真白く雪化粧した東京の中枢部を銃とサーベルで血染めにした2・26事件が起こった年である。またヨーロッパでは、3月7日、ドイツ軍のラインラント進駐、5月9日、イタリアのエチオピア併合の宣言など、不気味な戦雲が低く垂れこめ、来たるべき大戦の序幕ともいうべき年でもあった。

この年の7月17日の夕方、かねてからの噂のとおり、スペイン領モロッコのメリーリャ、セウタ、テトゥアンの各駐屯地で、フランコ (Francisco Franco, 1892-1975) 将軍ら数名の現役将軍の支持を得たスペイン正規軍の一団の将校が、2月の総選挙で勝利した人民戦線の共和国政府に対して、軍事叛乱の狼煙をあげた。たとえば、メリーリャでは、叛乱軍の将校たちはピストルを上官である将軍につきつけ、彼を辞職させた。次いで戦争状態を宣言し、一切の公共建造物を占拠し、人民会館をはじめすべての左翼系の団体や組織を閉鎖し、共和派や左翼団体のすべての指導者を逮捕した。こうした叛乱軍の動きに激しく抵抗する者もいたが、不意打ちを食わされた労働者側は武器も乏しく、所詮、敵ではなかった。抵抗した人、労働組合員、2月の総選挙で人民戦線に投票した人などは逮捕され、なかには処刑される危険があった。これ以降メリーリャは軍法で統治され、この方式が叛乱軍の模範として踏襲されることになった。

叛乱軍の将校たちは、叛乱の合言葉「異常なし (Sin novedad)」⁽¹⁾を打電した。この合言葉に呼応して、翌18日、スペイン本土の約50カ所の主要駐屯地でいっせいに軍事叛乱が起こった。しかも、この軍事叛乱に対して、共和国政府は何ら有効な措置を講ずることもできず、ただ狼狽するばかりであった。18日朝、ラジオ・マドリードは「何人も、スペイン本土では絶対に、このおろかな

陰謀に参加していない」⁽²⁾という政府声明を放送するだけであった。カサレス・キローガ (Casares Quiroga, 1884-1950) 内閣は労働組合員や市民からの武器の要求を拒否し、総辞職した。その間、「ラ・パッシオナリア (情熱の花)」という愛称の、共産党の女性指導者ドロレス・イバルリ (Dolores Ibaruri, 1895-1989) は内務省の無線局から、全国的な抵抗を訴える放送を行った。「皆さん、膝を屈して生きるよりは、足で立って死にましょう！ ノー・パサラン (奴らを通すな)！」⁽³⁾この最後のスローガンは、各音節をはっきりと発音しながらくり返され、たちどころに共和国の抵抗運動の関の声となったのである。

後継のマルティネス・バリオ (Martines Barrio, 1883-1961) 首相が叛乱軍との交渉に失敗したために、わずか8時間で辞任し、ホセ・ヒラル (Jose Giral, 1880) 内閣が誕生した。やむなく、ヒラル政権は労働諸団体の武装化を決定したが、政局は一挙に未曾有の大混乱におちいった。

しかし、この軍事叛乱にいち早く対応したのは、スペインの市井の民衆、とりわけアナキスト系の労働国民連合 (CNT) や、社会労働党系の労働総同盟 (UGT) の労働者たちであった。彼らは、マドリード、バルセロナの軍事叛乱をすみやかに鎮圧した。第三の都市バレンシアも、軍の指揮官の優柔不断な指揮のために、ほぼ数日後、共和国側に制圧された。この時点で、従来から「無知蒙昧で羊のごとく従順」と軍当局から蔑視されてきたスペインの市井の民衆が、叛乱軍に対して、屈辱的な隷属よりも果敢な武力抵抗による「内戦」を、さらにはよりよき社会を建設するための「革命」を選んだのだった。

ここに、2年9ヵ月におよぶスペイン内戦の「原風景」があった、といえよう。

結局、マドリード、バルセロナ、バレンシアの三大都市は共和国側の掌中に収まったのである。スペイン本土で叛乱軍が成功したのは、伝統主義的な志向の強い北部のナバラ地方とガリシア地方、さらに中央部のメセタ地方、それに南部のアンダルシア地方の小都市であった。

緒戦の戦局を決定するのは、北アフリカの叛乱軍の本土侵攻であったが、海軍が叛乱に加担しなかったために、ジブラルタル海峡の制海権を握っていたのは共和国政府であった。7月20日の時点で、軍事叛乱、戒厳令の布告、軍事政権の樹立を目論んでいた叛乱軍首脳にとって、この軍事叛乱は挫折したかのように思えたのだった。これは、予想だになかった事態であった。

それにしても、イギリスのスペイン内戦史家ヒュー・トマス (Hugh Thomas) も指摘しているように、共和国政府の対応はあまりにも杜撰、かつ怯懦であった。⁽⁴⁾同様に、イギリスの『タイムス』紙も、「できるだけ早い時期に労働者階級を共和国防衛にあたらせていれば、叛乱軍の粉碎は不可能ではなかったであろう」⁽⁵⁾と報じている。

2 1930年代前半のイギリスの社会状況

当時のイギリス国民は、このスペイン内戦をどう受けとめていたのだろうか。それを述べる前に、イギリスの1930年代前半の社会状況を見ておかなければならない。

1930年のイギリスは、その前年にアメリカで起こった世界恐慌の大波をものにうけていた。輸出の急減と連鎖反応的な企業倒産のために失業率は20パーセントに達し、250万もの失業者が巷にあふれていた。失業者の救済とその対策を訴える「飢餓行進」が全国津々浦々からロンドンへ向かった。1931年4月、W・H・オーデンは、イギリスの閉鎖的な社会状況を、次のような詩に託した。

できるならそこへ行って、かつて誇っていた自分の国を見るがよい、
道という道はほとんど消え、急行列車は一台も走っていないが。
煙を吐かぬ煙突、損傷を受けた橋、腐った波止場、ぎっしり詰まった運河、
鉄路はねじ曲がり、トラックは押しつぶされてレールの上に横倒し。
発電所は閉ざされ、人影もなく、ボイラーの火も消えたのだ。
鉄塔は倒れ、沈み込む、死んだ高圧線を引きずっている。
草生い茂る坑口に不気味に転がる坑夫帽、何年も前に放棄された鉋屑。
石を落として、水がいっぱい溜まった真暗な底にはねる音を聞け。⁽⁶⁾

国家財政も失業保険基金の国庫からの莫大な借入金のために破局に瀕していた。しかも、29年6月に成立した第二次マクドナルド (Ramsay MacDonald, 1866-1937) 労働党内閣は、こうした難題に対応すべく有効な政治的手腕をもっていなかった。赤字財政克服のために、失業手当10パーセントの削減、公務

員の給与の減俸などをマクドナルドは閣議に提案するが、これをめぐって内閣が分裂し、労働党への国民の期待は地に落ちてしまった。31年8月、内閣は赤字財政問題のために総辞職した。

これを契機に、保守党・労働党・自由党の三党協力による挙国内閣が誕生することになった。首相には、おおかたの予想に反して、再びマクドナルドが決まった。この挙国内閣も、失業と生活苦にさいなまれていた労働者階級に冷淡だった点では、労働党内閣と同様であった。しかも挙国内閣の誕生によって、従来の三党の対立ないし協調という政治的伝統が突きくずされ、国民が選挙によって政治に実質的な影響力をおよぼす可能性が失われてしまった。このような閉鎖的な政治状況は、きまって議会の枠組を越えた、左右の直接的な政治運動を生み出す。

たとえば、第二次マクドナルド内閣の閣僚だったサー・オズワルド・モーズリ（Sir Oswald Mosley, 1896-1980）は保護関税と公共投資を含む失業対策を立案したが、閣議で否決されたため、憤然として辞職し、「5人足らずの中央執行部による政府」を主張する「新党」⁽⁷⁾を結成した。31年10月に「新しい運動の新しい週刊誌」と銘打った『アクション』が創刊され、モーズリの主張が掲載された。

ただ単に、政治権力の獲得を目的としている運動、戦後の諸目的によって国民生活のあらゆる相と局面を把握し、それを変形する運動、秩序、規律、忠誠の運動ばかりでなく、ダイナミックな進歩の運動、鉄のように強い決定、不屈さ、リアリティーの運動、現代国家の意味に合わせて過去の結び目を剣で一刀両断にするような運動などを、われわれは創り出さなければならぬ。もし諸君がこのような運動に奉仕するつもりがあるなら、いまこそそうすべきである。⁽⁸⁾

しかも彼は、挙国内閣誕生に抗議して、翌32年10月に従来のファシスト系や国家社会主義系の小集団を糾合し、「イギリス・ファシスト同盟」⁽⁹⁾を創設した。続いて彼が設置した「イギリス・ファシスト労働者同盟」と「ファシスト自衛軍」は、この「同盟」の外郭団体だった。ことに後者のメンバーには、イタリアのファシスタ党にならい、黒シャツの制服の着用を義務づけた。フェンシング選手のチューニックのような黒い長上衣、大きな真鍮のバックル付きの

幅広い黒の革バンド、黒ズボンにブーツといういでたちだった。彼らはロンドンの旧ホワイト・コレッジを司令部兼兵舎として利用し、歩哨、騎馬衛兵の儀式、合図のラッパなど、軍隊方式一辺倒で統制されていた。この兵舎だけで潜在常駐要員は5000名にもふくれあがり、ロンドン以外の数多くの地方都市にも、小規模ながら同じような組織があった。

たとえば、ロンドンのアルバート・ホールで警官隊に護られつつ催された集会を『タイムス』紙は、次のように報じた。

ホールのなかでは、サー・オズワルド・モーズリが登場する前に「黒シャツ隊」の一隊が到着し、主要通路に陣取り、太鼓が鳴り、ラッパが響きわたった。サー・オズワルド・モーズリがホールの隅からずっと演壇まで歩いて行ったとき、「黒シャツ隊」と聴衆は立ち上がって、ファシスト流の敬礼をし、軍歌が演奏され、ホールのギャラリーからはスポットライトがサー・オズワルド・モーズリにあてられ、歓声がわき起こった。⁽¹⁰⁾

このイギリス・ファシスト同盟は、創設以来、勢力拡大とプロパガンダを自的として、大々的な屋内集会、街頭デモなどを各地で展開した。彼らはユダヤ人、有色人種、労働者の居住区域を攻撃対象に選び、挑発的なデモをしかけたり、左翼のデモを実力で妨害したりしていた。イギリス・ファシスト同盟を中核とするファシスト運動は、1934年および39年にピークを迎えたが、その正規の同盟員は約1万人だったという。⁽¹¹⁾あるいは、3万5000人という数値もある。⁽¹²⁾

このような公然たるファシスト運動に対抗して、反ファシスト運動もしいだに広まるにつれ、両勢力の激突がしばしば繰り返され、双方に負傷者を出すまでにいった。

反ファシスト運動の中枢になったのは、今や権力の魔力にとりつかれ、労働者階級の裏切者と糾弾された挙国派労働党ではなく、労働党左派と共産党、およびそれらに同調する諸組織であった。弱少の共産党は党員を表面に出さないさまざまなフロント組織や団体をつくり、党路線にそって運営していたが、現実には労働者階級の一圧力団体にすぎなかった。1930年代における共産党の公式発表によると、党員数はその最高時にあたる1939年でさえ、1万7756人にすぎなかった。⁽¹³⁾

この時期の左翼運動に見逃せない特徴として、中産階級出身の知識人の参加があった。彼らは1930年代の時代思潮となった左翼イデオロギーの洗礼を受け、世界恐慌こそ来たるべきプロレタリア革命の萌芽であるとするマルクス主義者、ソ連への絶対的信仰を保ち、階級的革命路線を放棄し、体制内での反ファシズム路線を探っている共産黨員、社会の不正の摘発と弱者の救済を願っている社会的人道主義者、平和主義者など、思想的にはかなりの幅があった。もっとも、彼らのなかでほぼ共通していたのは、伝統的で高踏的な自由主義的な教育を身につけ、みずからの帰属する階級にある種の罪悪感を抱き、従来の支配階級である上流階級に根強い不信の念を表明していたことである。その反動が労働者階級の理想化として現われたが、現実には彼らは労働者階級に身をおくことができなかった。こうしたディレンマが、現実の政治運動とは直接的なチャンネルをもちえないまま、みずからの政治イデオロギーをかたくなにもロマンティックなものにさせてしまった。

反ファシズム運動のなかで、刮目に値するのは、1936年5月に創設された「レフト・ブック・クラブ」(以降、LBCと略す)であった。この前年の35年8月、モスクワでコミンテルン第7回国際会議が開かれ、蔓延しつつあるファシズムの暴虐に対して、それを断固として阻止するために、社会主義の達成を一時延期し、広汎な反ファシズム勢力と提携し統一的な労働運動を展開して人民戦線を構築するという基本路線が採択された。人民戦線の統一勢力が、36年2月にスペインで、同年6月にフランスで、それぞれ国政選挙に勝利し、人民戦線内閣が誕生した。LBCの目的は「世界平和のために、ファシズムに対する恐るべき緊急な戦いを、その戦いに参加する決意のすべての人びとに、その効果を著しく高める知識を与えることによって援助しよう」⁽⁴⁾ということだった。そうはいっても、LBCの政治路線は、基本的には人民戦線、すなわち共産党路線支持であった。

当時の出版界の風雲児といわれたゴランツ書店の社主ヴィクター・ゴランツ(Sir Victor Gollancz, 1893-1967)、労働党下院議員で評論家のジョン・ストレイチャー(John Strachey, 1901-63)、ロンドン大学教授で政治学者のハロルド・ラスキ(Harold Laski, 1893-1950)の3人からなるLBC選書委員会が構成され、発足時点で6000人の会員を擁した。会員は、月に2シリング6ペンスの会費を納入すると、その月の選定本を受け取れるのである。これ以外にLBCは、地域別の「討論グループ」の組織化、『レフト・ニュース』誌の無料

配布、政治問題や時事問題を解説した小冊子やチラシの配布といった出版教育活動を通じて、創設後2年にして、会員数5万7000人、「討論グループ」が600余りの、イギリス屈指の政治的な文化運動団体へと成長していった。それにしても、LBCの共産党寄りの政治路線に異議を唱える者もいた。たとえば、ジョージ・オーウェルは、彼の半自伝的小説『空気を求めて』(Coming Up For Air, 1939)のなかでLBCの集会を戯画的に描写している。

彼女の真うしろに、この地方の労働党の老人が2人坐っていた。ひとり
は灰色の髪で非常に短く刈り込み、もうひとりとは禿げ頭でわびしい口髭を
生やしていた。どちらも外套を着こんでいた。どこでもよく見かけるタイ
プである。子供の頃からの労働党員で、生涯を党の運動にかけてきた。20
年間、雇用主のブラックリストに載り、さらに10年間、スラム街に何かし
てくれ、と地方議會を悩ませたような人物だ。突然、なにもかもが変わっ
てしまい、老労働党員はもはやどうでもよくなった。不意に、外交政策
——ヒットラー、スターリン、爆弾、機関銃、ゴム製警棒、ローマ＝ベル
リン枢軸、人民戦線、反コミンテルン協定——に、自分たちがいやおうな
しに押し込められる。何がなんだかさっぱりわからない。ほくのすぐ前の
列に、この地方の共産党支部の連中が坐っていた。彼らは3人で、いずれ
も非常に若かった。……この3人の共産党員のとなりに、もうひとりの共
産党員が坐っていた。しかし、この男は種類の違う共産主義者のように見
えるが、まったく違うというわけではない。というのは、彼はトロツキス
トと呼ばれているからである。他の連中は彼をひどく嫌っていた。彼はか
なり若く非常に痩せていて、とても陰気で神経質そうな青年であった。賢
そうな顔。もちろんユダヤ人。この4人の青年は講演会を、他の人たちと
はまったく違ったように考えていた。いつものように、質問の時間に入る
とすぐに彼らは立ち上がるのであった。もうすでに、彼らは身体をびくび
く動かしているのが見える。そして、あの小柄のトロツキストは、他の連
中よりも先んじようとして、尻をもぞもぞと左右に動かしていた。⁽¹⁵⁾

共産党嫌いなオーウェルからすれば、このような印象を抱くのも、宜なるか
なであったろう。

こうした国会外の左右の政治的対立がいわば極点に達した時期に、さらに左

翼陣営での不協和音が顕在化してきた頃に、スペイン正規軍の軍事叛乱とそれに対峙した民衆の武力抵抗のニュースがイギリスに伝えられたのである。

イギリス国民は、スペインで相対して激しく抗争を繰り広げている両陣営のいずれかに、みずからを帰属させ支援するようになった。「ピレネーの南はアフリカだ」とつねに蔑視されてきたスペインが、いわば時代を先取りした希望の星と映った。1930年代になり、社会的地盤沈下に見舞われ上昇のチャンスがうかがっていた上流階級は、スペインの叛乱軍とその同調者たちの行為を快挙とみなし、一方たえず要求が無視され、疲弊しきった労働者階級は、スペインの民衆の行為を新しい社会革命とみなした。こうした支援には、イデオロギー的要素だけでなく、積年の階級の対立から生じた感情的なものも加わり、スペイン内戦が「フランス革命以降、はじめてイギリス国民を決定的に分裂させた対外問題」⁽¹⁶⁾となったのである。

3 人民オリンピックの中止と国際旅団の創設

折しも、この7月19日から1週間、バルセロナで、「オリンピアーダ・ポピュラー（人民オリンピック）」⁽¹⁷⁾という名称の、国際的なスポーツ大会が開かれることになっていた。「世界平和のためのスポーツの祭典」と銘打ったこの大会は、8月1日から始まるベルリン・オリンピックに対するボイコット運動の究極的な到達点であった。

ところで、ベルリン・オリンピックは、その準備段階で、露骨なユダヤ人排除と軍国主義に彩られたヒトラー・ドイツの国威発揚のための「ナチス・オリンピック」に変容してしまった。こうしたナチス・オリンピックに対する抗議が、ユダヤ人亡命者の最も多いアメリカから起こり、これがやがてヨーロッパ大陸へ波及することになった。当初は人道主義的な運動だったが、そのうちナチスの「第三帝国」の実態が詳らかになるにつれ、単なる抗議ではなく、ボイコット運動へと、さらにナチス・オリンピックと対抗する「もう一つのオリンピック」を開催しようという運動へと進展していったのである。

7月19日が開催式と決まった。ところで、ベルリン・オリンピックが「オリンピック復活40年」を記念して、はじめてギリシャのオリンピアの遺跡からベルリンへ聖火リレーすることとなり、20日がその採火日となった。その日から12日かけて、8月1日の開催日にベルリンのオリンピック・スタジアムへ運ぶ

ことになっていた（余談であるが、このオリンピック史上初の聖火リレー・コースが、3年後の第二次大戦の緒戦における「ナチスの欧州新秩序計画」の軍用道路として活用されたのである）。⁽¹⁸⁾この採火日の前日に、人民オリンピックの開催式を行うことにしたのである。

しかしながら、この人民オリンピックも、スペイン内戦の勃発のために、見果てぬ夢となった。開催式の前日の最終リハーサル最中に、音楽総監督のパブロ・カザルスところに、市街戦が起こりそうなので中断してほしいと、バルセロナ市当局の人から伝えられたのである。⁽¹⁹⁾

それにしても、幻に終わった人民オリンピックとは、どのような性格のスポーツ大会だったのだろうか。人民オリンピック関係者たちは共和派だったために、内戦の敗北によって、亡命か処刑（たとえば、人民オリンピック名誉大会委員長を務めたカタルーニャ自治政府のルイス・コンパニース [Luis Companys, 1883-1940] 大統領は、1940年、亡命先のフランスでナチスのゲシュタポに逮捕され、バルセロナのモンジイック城で、2ヵ月間の残酷な拷問のあと、銃殺刑に処された。銃声は5発だったという）⁽²⁰⁾、投獄などの弾圧にあり、人民オリンピック関係の史的資料が全くといってよいほど散逸してしまっている。そのため従来から、このスポーツ大会が左翼のスポーツ大会とわれてきた。さらに、「赤のオリンピック」と断定し、共産主義革命のバルセロナ版とみなす立場もある。

このバルセロナ・オリンピックのために全世界から多数の共産主義者が同市に集まった。もし実際に8月1日を期して共産革命が計画されていたことを本当とすれば、彼らはその時生まれたかもしれないスペイン共産軍の第一線にたって戦う者となりうる者であった。共産系新聞がきわめて強力な宣伝を行なった同オリンピック大会の開会日は7月20日と決められていたが、大会参加者は数千名にのぼる運動選手(?)であった。この数字からして、このオリンピック大会がいかなる内容をもっていたか、われわれとしては疑問に思うのである。⁽²¹⁾

この人民オリンピックの性格や政治的立場は、今後も議論の余地を残すことになるだろうが、1936年7月11日、つまり人民オリンピック開催式の一週間前、スペイン共和国代議上で、組織運営委員会のジョセプ・A・トラベル委員

長は記者会見を行ない、社会生活のなかでのスポーツの重要性、大衆のスポーツ競技への参加の意義について述べたあとに、「バルセロナ人民オリンピックの重要性とは、どこにあるのか」という記者団の質問にこう答えた。

ところで、バルセロナ人民オリンピックが他のオリンピックに対抗して開かれるのだとか、特定のイデオロギーに反対して開かれるのだと考える人がいるとすれば、残念ながら間違っている。バルセロナ人民オリンピックはスポーツのイデオロギー化に対して反対の立場である。たまたまそこに、特定のイデオロギーが目だったり、それに反対する運動という要素があったにしても、それは本来の健全なスポーツ精神を無視しようとしたり、あるいは人びとの共存や民主主義精神を許さない政治体制があったりするからである。⁽²²⁾

この委員長の発言からも、人民オリンピック関係者が、この大会を政治的偏見で捉えられることに、いかに苦慮していたか、わかるであろう。

ところで、人民オリンピックにエントリーを決めた国は23カ国、参加予定選手は、ベルリン・オリンピックをボイコットした第一線クラスの選手を含め、大会組織委員会によると、約6000人におよんだ。ちなみに、ベルリン・オリンピックの参加国は、49カ国で、参加人数は4069人であった。

それにしても、人民オリンピックは中止を余儀なくされたが、約6000人の選手団はどうしたのだろうか。既に引用したように「共産主義革命」に挺身したのだろうか。それとも、直ちに帰国の途についたのだろうか。

7月23日付のバルセロナで発行されている『エル・ディア・グラフィコ』紙によれば、「フランス船二隻がフランス選手団引き揚げのため、バルセロナに入港」⁽²³⁾し、また、「オリンピックのためにバルセロナに滞在中のイギリス人の安否を気遣い、イギリス艦隊の提督が、昨日、カタルーニャ政府大統領を表敬訪問した」⁽²⁴⁾という。この2篇の記事からも、フランスとイギリス両政府が選手団の引き揚げのために直ちに対応した様子がうかがえる。

しかし、フランス人やイギリス人のように帰還できた外国人選手団以外の参加予定者はどうなったのだろうか。具体的には掴みがたいが、たとえばファシスト政権下のドイツやイタリアの場合、そのまま亡命せざるをえなかったと思われる。

人民オリンピックの取材のためにバルセロナ入りをしていたイギリス共産党機関紙『デイリー・ワーカー』の特派員で詩人のトム・ウィンtringham (Tom Wintringham, 1898-1949)⁽²⁵⁾によると、7月19日未明の叛乱軍と市民との市街戦に、このオリンピック参加予定選手が自主的に参加した。そのとき、国籍とか共通言語単位で編制された、各グループは、「セントウリア (百人隊)」とか「大隊」とか呼ばれ、それに有名な革命家の名前や都市名、あるいは政治的なスローガンを冠していた。たとえば、イタリア人は「ガストーネ＝ソツツイ大隊」、ドイツ人は「テルマン・セントウリア」、フランス人とベルギー人は「パリ大隊」、ポーランド人は「ウルブルフスキー将軍・セントウリア」などであり、イギリス人の場合は、当時バルセロナに来ていたロンドン東部出身の衣料品製造の労働者サム・マスターズとナット・コーヘンの2人の共産党員が中心となって、イギリス労働運動の指導者トム・マン (Tom Mann, 1856-1941) の名にちなんだ「トム・マン＝セントウリア」という部隊を編制したが、この部隊は実戦に役立つほど兵員が集まらなかった。「トム・マン＝セントウリア」は9月下旬になって、ようやく戦線に投入された。

ちなみに、イギリス人義勇兵のなかで、最初の戦死者はフェリシア・ブラウン (Felicia Brown) という女流画家であった。彼女は8月25日アラゴン戦線で射殺された。

こうした内戦勃発時の外国人義勇兵、スペイン共和国の防衛のためにさらに続々とピレネーを越えてきた義勇兵を総称して、「インターナショナル・コラム (International Column)」と呼んでいた。また当時のスペインの新聞も、同様に、「コルムナ・インテルナシオナル (Columna Internacional)」と呼んでいた。「国際義勇軍部隊」と訳しておこう。

この国際義勇軍部隊の活躍は、それほど詳らかにされていない。それは、後にこの部隊が基盤となって編制された国際旅団の活躍がめざましく、その陰にかくれてしまったからである。ほんのわずかだけ、たとえば、エズモンド・ロミリー (Esmond Romilly) の『ボアディリア』(*Boadilla*, 1937)⁽²⁶⁾、ジョン・ソマーフィールド (John Sommerfield) の『スペインの義勇兵』(*Volunteer in Spain*, 1937)⁽²⁷⁾などに、その片鱗が示されているに過ぎない。また、スペイン人のなかには、たとえば、哲学者で外交官のサルバドル・デ・マダリアーガ (Salvador de Madariaga, 1886-1978) の『スペイン』(*Spain*, 1942)⁽²⁸⁾、内戦末期にマドリードで共産党にクーデターを起こし、叛乱軍のフランコとの

平和を画策したカサード大佐 (Segismund Casado, 1893-1968) の『マドリードの最後の日々』(*The Last Days of Madrid*, 1939)⁽²⁹⁾にも、この国際義勇軍部隊について触れられている。

国際義勇軍部隊の軍事的貢献に着目したのは、コミンテルンであった。コミンテルンのいかなる機関で決定されたか、関係資料が保存されておらず、関係者もすでに物故しているのも、断定的なことはいえないものの、コミンテルン書記長のゲオルギー・ディミートロフ (Georgii Dimitrov, 1882-1949) が提案したといわれている。8月下旬か9月上旬に、ソ連の西ヨーロッパの軍事情報機関の責任者のクリヴィツキー将軍 (Walter Krivitsky, 1899-1940) と N K V D (ソ連内務人民委員部) のゲンリヒ・ヤコーダ (Genrikh Yagoda, 1891-1938) 長官とのあいだで、外国人義勇兵の派遣と戦線投入に関して合意ができた。スターリンは10月10日付のソ連共産党機関紙『プラウダ』で公然とスペイン介入を宣言した。

10月22日、スペイン共和国首相ラルゴ・カバリェロ (Largo Caballero, 1869-1946) は、国際旅団の創設を承認した。当然であるが、国際義勇軍部隊の各部隊は、すみやかに国際旅団に吸収された。これより以前の、すでに10月9日、アリカンテに上陸した600余りの外国人義勇兵がアルバセーテへ向かい、さらに14日には、約500人がパリから陸路を経てアルバセーテに到着した。このような一連の既成事実によって、社会労働党のラルゴ・カバリェロ首相は共産党の発言力が強化されるのを危惧しつつ、国際旅団の創設を承認せざるをえなかったといえよう。

国際旅団の活躍は目ざましかった。孤立無援の共和派のスペイン人にとって、国際旅団はまさに「伝説」であった。スペインの詩人、ラファエル・アルベルティ (Rafael Alberti, 1902-) は、"A las Brigadas Internacionales" という国際旅団を讃美する詩を書いている。

君たちは遙か遠くからやってきた。

国境を越えて歌う君たちの血には、距離などは問題でない。

不可避な死は、いつの日か君たちの名を呼ぶだろう。

どこで、どの町で、どの戦場でかは誰にも分りはしない。

この国から、あの国から、大きな国から、

地図に名を留めるだけの小さな国から、
同じ理想を共有しながら、
名も知らず、ただ語り合いながら君たちはやってきた。

君たちが守ろうと誓った家々の、
壁の色さえ知ってはいない。
君たちを埋葬する大地を、死を賭して、
防衛せよ！

留まれ！
木々も野原も蘇生する光の微分子も、
海から放射される情念もそれを望んでいる。
兄弟たちよ！ マドリードは君たちの名とともに永遠に光り輝く。⁽³⁰⁾

スティーブン・スペンダーの親友、マニユエル・アルトラギーレ（Manuel Altolaguirre）も、アルベルティと同じタイトルの詩を書いた。最終スタンザを紹介しておこう。

瀕死のスペインの真只中に
美わしきアメリカ的生を
蘇生させた。
勇敢な子どもたちが集うこの庭に。⁽³¹⁾

「遙か遠くからやってきた」国際旅団の活躍は軍事面だけではなくた。医療、教育、プロパガンダなど後方任務にも、国際旅団は大いに貢献した。

たとえば、国際旅団の医療部隊に所属していた女医フリッツィー・ペーは、自らの体験をふまえて次のように述懐している。

ここに到着した当初、私たちは、スペインの自由と独立のために外国の侵略者と戦い、負傷した英雄的兵士かちを治療したいと考えていました。

その仕事に従事するうちに、爆撃や物資の欠乏に苦しむ多くのスペイン人の子供たちがいることに気づきました。とりわけ、家族や家を失って難

民施設に暮らすことを強いられている子供たちは、食糧不足と非衛生的な生活環境のため、しばしば罹患していました。

私たち医療チームは、職場である医療センターの全てに子供たちのための救護施設を設け、伝染病防止のためのワクチン接種を行なうかたわら、皮膚病、眼病、歯の疾患の治療にたずさわったのです。

炎症が完治して、目を輝かせながら握りこぶしをふりあげて「あいさつ」する小さな患者たち、そのひとりひとりに通りで出会うたびに、私たちは、自由スペインの未来の市民を救済した喜びに包まれました。⁽³²⁾

ところで、1938年11月15日の解散まで、国際旅団には、どのくらいの外国人義勇兵が馳せ参じたのだろうか。さまざまな説があるが、比較的信頼できる数字として、第15国際旅団イギリス人大隊の大隊長、トム・ウィントリンガムの見解をあげておこう。

全体として国際旅団に参加した義勇兵の総数はまだ大まかな数字しかわかっておらず、次にあげる数字は全く非公式なものである。全部で5万人弱の外国人義勇兵がスペイン共和国軍の戦列で戦った。これらの兵士のうち4万人を若干こえる義勇兵が、国際旅団が活躍していた2年間のあいだ、この旅団に参加した。残りの兵士たちは国際旅団が結成される1936年10月以前にスペインでの戦いを終えていたり、バルセロナに拠点をもつ、(反スターリスト系の) マルクス主義労働者統一党(P O U M)やその他のアナキストの陣営に参加していた。だがもちろん、一時に国際旅団が銃後をも含めて4万人の兵力に達したことは一度もない。義勇兵たちは一度にかたまってスペインにやって来たわけではなく、18ヵ月以上にわたって、バラバラにやって来たのである。国際旅団が前線で、1万5000人もの外国人戦闘員をそろえたことなど一度もなかった。⁽³³⁾

ところが、第二次大戦の緒戦段階で、ドイツ軍がパリを占領したとき、左翼系の組織や団体が根こそぎ破壊されてしまった。パリのリュ・ド・マテュラン・モロー8番地の国際旅団派遣本部、「スペイン人民戦線派遣義勇軍委員会」も、その運命をまぬがれなかった。内戦期に叛乱軍の仮首府であったサラマンカの「内戦資料文書館」に収められている国際旅団義勇兵名簿は、フランコ軍

が押収した名簿であって、正確とはいいがたい。たとえば、唯一の日本人義勇兵、ジャック白井^[34]の名前は見当たらない。

結局、現在において、国際旅団の義勇兵の総数は、正確には掴みきれないが、現在のところ、55カ国から、ほぼ4万人の外国人義勇兵、それに2万人もの大隊付の医療部隊をはじめ後方任務についた非戦闘員、というのが定説のようである。^[35]

4 不干渉政策とその波紋

緒戦において、叛乱軍の目論見がはずれ、頓挫しかかったようだった。だが、叛乱軍のフランコ將軍は外国からの限定的な軍事援助を求めることにした。この場合、外国といえば、ドイツとイタリアであった。7月19日、彼は王党派の『ABC』紙のロンドン特派員、ルイス・ボーリン（Luis Bolin, 1894-1969）をローマへ、7月22日、フアン・ベイグベデル（Juan Beigbeder, 1890-1957）大佐をベルリンへ、それぞれ派遣した。両国の独裁者はスペインで内戦が勃発するとは予期していなかったために、フランコへの援助を決定するのに思いのほか時間がかかった。7月28日、ヒトラーはユンカース52型輸送機20機をセビリヤとスペイン領モロッコに送り、フランコ將軍麾下の精鋭部隊がジブラルタル海峡を越えはじめた。ムッソリーニもサヴォイア81型爆撃機12機を送った。ただし、そのうち1機が海に墜落、2機がフランス領モロッコに不時着した。この予期せぬ事故がイタリアの動かしがたい介入の証拠となったのである。8月3日にドイツ戦艦ドイッチュランド号がセウタに投錨した。8月6日、おそらく総計で40機ほどのドイツとイタリアの飛行機を叛乱軍の海峡横断掩護のために投入し、フランコはアフリカ軍をスペイン本土に上陸させることができた。今や、スペインは全面的な武力衝突を展開する戦乱の地と化したのである。

こうしたドイツやイタリアの叛乱軍側への介入を目の当たりにして、ヨーロッパの列強は、スペインでのこの内戦を「対岸の火事」として見すごすわけにはいかなかった。すでに叛乱軍に好意的な中立を保っていたイギリスはその姿勢をさらに一歩進めて、叛乱軍側のポルトガル諸港にある非登録船艇に関する情報を叛乱軍に流したり、叛乱軍がイタリア、ドイツ、ポルトガルとの連絡にジブラルタル電話局の利用を許したり、それでいて共和国側に石油の供給を拒

否したのである。⁽³⁶⁾そのイギリス政府が、スペインの内戦をイベリア半島に押しとどめようとして、7月23日、ロンドンでフランス政府と会談をもった。スペイン共和国と同様の人民戦線政府（1936年6月成立）のフランスのブルム（Leon Blum, 1872-1950）内閣は、すでに「兄弟のよしみとして」⁽³⁷⁾スペイン共和国に爆撃機20機をはじめとする兵器類の援助の約束をしていたが、イギリス政府はフランス政府に強い圧力をかけ、スペイン問題に関する不干渉政策に同意させた。8月1日、フランスのブルム首相は、スペイン内戦に対する不干渉政策を発表した。これは、約束済みのスペイン共和国政府への兵器類の援助の破棄も含まれていた。このブルムの外交政策に、当時のフランス社会党のジャン・ブラデルは、「フランス政府がスペインに武器を送らないことは、政府は社会主義を背後からナイフで突き殺すことを意味する」とか「われわれの臆病さゆえに、わが兄弟が敗北するとしたら、われわれは自分の墓穴を掘ることになる」⁽³⁸⁾などと、痛烈に批判した。

8月4日、ロンドンで不干渉委員会が発足した。現実には叛乱軍側に兵器や兵員などを大量に送り込んでいるドイツやイタリア、それに叛乱の謀議段階から叛乱軍に肩入れしてきたポルトガルも、この委員会に加盟した。かねてからヨーロッパの列強の一員になりたいと目論んでいたソ連も、遅まきながら、8月23日に加盟した。ソ連政府は、反ドイツ戦線の成否を握っているヨーロッパ民主主義国の穏健諸党を敵にまわすのを避けるためと、ソ連がプロレタリアの世界革命の公然たる奨励国だとレッテルをはられるのを嫌ったためであった。

結局、ヨーロッパ27ヶ国が不干渉委員会に加盟することになった。加盟しなかったのは、当事国のスペイン共和国と永世中立国のスイスのみであった。

9月9日、ロンドンで、不干渉委員会の第一回総会が開かれ、常任議長国として、イギリスが選出された。不干渉委員会は、原則的にスペイン共和国政府に対して非好意的であった。

当時のボールドウィン（Stanley Baldwin, 1867-1947）挙国内閣の主流を占める見解は、「ファシストとボリシェヴィキが相互に殺し合うような戦争を希望する」⁽³⁹⁾といった、実に冷酷なものであった。

のちに「ロンドンの喜劇」⁽⁴⁰⁾と酷評されたこの不干渉委員会の設置により、スペイン政府は国際法上の正当な権利である兵器の購入が不可能となり、また国際連盟にスペイン問題を取り上げないという口実を与えてしまった。スペイン政府は不干渉条約が政府を叛徒と同等の立場においたことに遺憾の意を表明

したものの、国際的にまったく孤立させられ、結局、1931年4月に誕生したスペイン第二共和国の圧殺に、ヨーロッパの列強が等しく加担することになったのである。

J・P・ブリーストリー (J. P. Priestley, 1894-1984) は、多くの自由主義的なスペイン共和国支持者たちの感情を適確に表現した。

新聞界全体が、選挙で樹立した政府から権力をもぎとろうとする軍部を、ためらわず非難したであろう一時期があった。だが、今では、ヨーロッパをひとつの軍事基地へと変えつつあるファシズムは、一人の代弁者——あるいはむしろ数人の非常に強力な代弁者たち——をイギリスで見いだしていた。かかる代弁者たちと対立し、あまたの虚言に対して真実を主張することは、人民の自決権を信ずるわれわれすべての義務である。⁽⁴¹⁾

また、ステイーブン・スペンダーも、「不干渉政策は、アビシニア紛争の時点における武器禁輸がイタリアに対する軍需品と勝利の贈物であったという以上に、さらに醜悪で、もっと危険なことがわかり切っているファシスト勢力による干渉の支持である」⁽⁴²⁾と断罪した。

左翼陣営の政党や団体が、一致してボールドウィン挙国内閣のスペイン不干渉政策と大企業のスペインでの利権保護政策に反対するキャンペーンを展開した。

このキャンペーンに詩人も加わり、研ぎ澄まされた風刺詩を書いた。

たとえば、エジェル・リックワード (Edgell Rickword, 1898-1982) の、“To the Wife of Any Non-Intervention Statesman” の一節。

はじめはささやかに、しまいには大胆に
叛乱を起こした將軍どもを味方と呼ぶものだから、
パブリック・スクールでは庶民を馬鹿あつかいするように
教えられているものだから、
スペインは血を流している。このときイギリスは博奕を打って荒稼ぎをし
ようと屠殺場で殺し屋を買収する。⁽⁴³⁾

また、ブライアン・ハワード (Brian Howard) の “For Those with In-

vestments in Spain”の冒頭の一節。

ご辛抱願います。彼らスペイン人の半分は読み書きできないのです。
たとえしばらくは彼らが返済できないとしても、ご容赦ください。
彼らをお許しください。彼らが血を流すのを見るのは御免です。
ご容赦願います。彼らには祈る暇さえないのでから。⁽⁴⁴⁾

マドリードの北東のグアダラハラの凍てつく山地で戦う共和国軍兵士を思い
やった、ジェイコブ・ブロノスキー（Jacob Bronowski, 1908-14）の“Gua-
dalajara”の一節。

私が哀れんだとて何になるであろう。凍った体は
どうでもいいが、悩むのは私の心だ。
そして、どんなに身震いしようと、私の怒りはすべて
この刺すような痛みの風のなかでは、たいした力にはならない。

許してくれ、部署につく兵士たちよ。
お前たちは国王たちと私のようなものの憤激のために身を硬直させてい
る。
そして、ただお前たちの言葉にならぬ言葉を
私が口にすることを黙って耐えてくれ。

つかの間の吐息のような私の希望よ、
運命がお前たちの凍てついた戦線を突破し
王を破り、圧政者を倒し、
春になって嵐とともに世界が切り拓かれんことを。⁽⁴⁵⁾

こうした不干渉政策反対キャンペーンと呼応して、各地でスペイン共和国支
援の運動が湧き起こった。すでに広範囲に組織されていた「ファシズムの犠牲
者救援委員会」も再編された。1936年7月31日には、「スペイン医療救援委員
会」が設置され、8月10日には医師・看護婦、その他医療関係者からなる「イ
ギリス人医療部隊」の第一陣がスペインの戦場へ向かった。「ファシズムの犠

「犠牲者救援委員会」も、ドイツとイタリア両軍の軍事干渉を調査するために、2名の労働党下院議員、労働党上院議員と共産党員各1名の計4名の調査団をスペインへ派遣した。調査団はドイツ軍の兵器や砲弾の破片などをスペイン不干渉条約違反の決定的証拠としてもち帰り、1937年3月、エジンバラで開かれた労働党大会でそれらを展示してみせた。ついで、「スペイン救援全国合同委員会」が結成された。この組織はあらゆる政党・労働組合・宗教団体、そして既存の救援団体の連合体であった。この組織の議長には、保守党下院議員で、スペイン共和国政府の正統性を主張した『スペインを照らすサーチライト』(*Searchlight on Spain*, 1938)⁽⁴⁶⁾の著者アソル公爵夫人(Duchess of Atholl, 1876-1960)がみずからおさまり、自由党・労働党・保守党の下院議員1名ずつからなる合同書記局を編成した。この組織の地方支部はほぼ全国的に設置され、いくつかの支部では、独自の医療部隊や救急車をスペインの戦場へ送り込んだ。

こうした救援組織とは別に、「スペイン貿易船主協会」は『タイムズ』紙の広告欄全面を買いとり、政府の不干渉政策を厳しく非難した。

結局のところ、不干渉委員会は、ドイツとイタリアの叛乱軍への援助、ソ連のスペイン共和国への援助といった大きな内部矛盾をかかえつつ、内戦終結まで続いたのである。

5 『文士たちは味方する』⁽⁴⁷⁾

いままで書齋や象牙の塔に閉じこもり、あるいは文学サロンや文壇パブなどにたむろしていた文学者や知識人は、彼ら独自の高踏派的態度をかなぐり捨て、スペイン内戦にそれなりの反応を表明することになった。

1937年6月、『スペイン人民を防衛する世界の詩人たち』(*Les Poetes du Monde Defendent le peuple Espagnol*)⁽⁴⁸⁾誌の第6巻を編集し刊行した女流詩人ナンシー・キューナード(Nancy Cunard, 1896-1965)⁽⁴⁹⁾は、英語圏のフランコ支持の作家や詩人たちの活躍に刺激されて、スペインの戦場で交戦中の両陣営のどちらを支持するかというアンケート調査をするために、その総数は定かではないが、イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェルズの主要な作家や詩人を中心に大学教授、ジャーナリスト、国会議員、退役職業軍人らに回答の公表を前提にアンケートを送った。

そのアンケートの発起人には、N・キューナード、W・H・オーデン、S・スペンダーなどのイギリスの左翼詩人、L・アラゴン (Louis Aragon, 1897 -), J・R・ブロック (Jean Richard Bloch, 1884-1947), T・ツァラ (Tristan Tzara, 1896-1963) などのフランスの左翼作家、H・マン (Heinrich Mann, 1871-1950) などのドイツの反ナチ作家、P・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904-73) などのチリの左翼詩人といった、国際的に著名な左翼作家や詩人の12名が名を連ねていた。

そのアンケートの主旨は、次のように述べられている。

現在、以前になかったほど明確に、世界中のわれわれの多くのものは、どちらかの立場を断固としてとるか、あるいはとらざるをえないのである。曖昧な態度、象牙の塔、逆説、冷笑的な超越などは、もはや許されないであろう。

われわれは、イタリアやドイツにおいて、ファシズムによる殺人と破壊——そこでの社会的不正義と文化的終息を見てきた。そして、再興されたローマ帝国が国際的な裏切によって扇動され、アビシニアの太陽の下にある国を制圧したのも、われわれは見てきた。そうした植民地諸国における失意の何百万の人びとは、その遺恨を晴らしていない。

今日、その闘争はスペインで行なわれている。明日、それが他の国々で起こるだろう——われわれ自身の国で。しかしながら、ドウランゴとゲルニカでの受難、マドリードやビルバオでの忍耐強い苦悶、そしてアルメリアへのドイツ軍艦からの砲撃にもかかわらず、なおそうした事件に疑念を抱いている人も若干いるし、あるいはファシズムがみずから宣言している「文明の救世主」であるかもしれないと断言する人も若干いるのである。

われわれがあなたに質問しているのは次のことである。

あなたは、スペイン共和国の合法政府と人民に味方するか、それとも反対するか？

あなたは、フランコとファシズムに味方するか、それとも反対するか？

というのも、その両方の立場をもとらないということは、もはや不可能であるから。

作家や詩人たちよ、われわれはあなたたちの回答を印刷しておきたいのです。イギリスのなかで最も敏感な媒介者である、作家や詩人であるあな

たたちがどう考えているかを全世界に知らせたいと望んでおります。⁽⁵⁰⁾

この回答を寄せた146名のうち、圧倒的に多かったのは「共和国支持」の125名であり、「中立」は16名、「共和国に反対」は5名であった。したがって、この回答だけを見るかぎりには、スペイン共和国は無条件に支持されていたことが分かるだろう。だが、そのアンケートに回答を寄せなかった作家もいたはずである。たとえば、J・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) のように。⁽⁵¹⁾

おそらく、このようなアンケートに回答すること自体、政治的行為とみなして、それを忌避する例は、ジョイス以外にもあったであろう。

それはともかく、「共和国支持」を表明した125名の理由は、たとえば、S・ベケットのように大文字の一語綴りで「共和国奮起! (“UP THER E P U B L I C !”)⁽⁵²⁾としか回答しなかったのを除けば、多種多様であった。大雑把に分類すると、一番多いのは、「文化・文明の擁護」と「自由の擁護」がおのおの19名、ついで「合法政府の支持」が28名、「ファシズムと独裁に反対」が15名、「外国のファシストの侵略に反対」が10名、「社会主義の擁護」が9名、「民主主義の擁護」が8名、「平和と進歩の擁護」が4名、「アナキスト支持」と「共産党支持」がおのおの2名ずつであった。

このアンケートの実施時期 (1937年6月) には、その前年末のマドリード防衛戦 (1936年11月)、ゲルニカの無差別絨毯爆撃 (1937年4月) といったフランコ軍の攻撃ないし野蛮行為、バルセロナでの共和国内部の市街戦 (1937年5月)、その後の共産党の覇権、反トロツキスト・キャンペーンの開始といった一連の共和国の内部抗争が白日のもとに晒され、スペイン内戦の実態が一段と鮮明になってきていた。そのためか、共和国支持といっても、自分の政治信条や党派性を明確に表明したのは、たった4名であり、残りは、切羽詰まったような扇動的と思える質問に回答したという感が否めない。「文化」であれ、「自由」であれ、「民主主義」であれ、それらを擁護するのは当然すぎるほど当然であるからだ。

「中立」は、そのパンフレットのなかでも、「中立?」と「?」がつけられていることからして、どちらかを支持すると表明しなかったために、「中立」と編者によって分類されたわけで、厳密な意味での中立といえるかどうか、ともあれ、「中立」を表明した16名の理由も多様であるが、「文学者としての孤高を保つ」が6名で、たとえば、T・S・エリオット (Thomas Stearns Eliot,

1888-1965) は、次のように回答している。

私はもちろん（共和国政府に）同情しているものの、少なくとも少数の文学者は孤高を保ち、こうした集団的行動に参加しないことが最善である、と確信している。⁽⁵³⁾

ついで「ファシズムも共産主義にも反対」が4名で、残りは、「非妥協的な平和主義」、「スペイン内戦と自分が無関係」、「この質問自体ナンセンス」といった理由である。社会主義者を自認するH・G・ウェルズ（Herbert George Wells, 1866-1946）も、「中立」を表明した。

「共和国支持」を表明した5名は、おしなべて自分はファシズムを容認するのではなく、共産主義という大きな悪より、次善の策としてファシズムの小さな悪を選ぶという立場と、フランコをファシストというよりも愛国者と見なす立場である。たとえば、E・ウォー（Evelyn Waugh, 1903-66）は、次のように回答している。

私はスペインについて、一旅行者として、また新聞の一読者としてしか知らない。私はバレンシア政府の合法性に全く共鳴しないのは、ちょうどイギリス共産党が、国王、貴族、庶民の合法性に全く共鳴しないのと同じである。バレンシア政府は急速に墮落しつつある悪しき政府であると確信する。もし私がスペイン人だったら、フランコ将軍のために戦うであろう。一人のイギリス人として、私はこの二つの悪のいずれかを選ばねばならないという苦境に立たされていない。私はファシストではない。ファシズムがマルキシズムに代わりうる唯一のものでないならば、私はファシストにならないであろう。そうした選択が差し迫っているなどと示唆するのは、無益である。⁽⁵⁴⁾

こうしてみると、N・キューナードらのアンケートは、当時のイギリスの文壇ないし知識人のスペイン内戦の関心の度合いをおしなべて公平に提示したという点で、まことに示唆的である。

それにしても、銘記しておかねばならない事実として、「共和国支持」を表明した作家や詩人たちは、どのような理由があるにせよ、現実に共和国軍の戦

列で戦わなかった。もちろん、年齢の問題とか戦闘に耐える精神力と肉体という問題があるので、必ずしも全員が戦列に加わるべきだとはいわないまでも、「イギリス人医療部隊」に属し、戦地へ赴いた者ですらごくわずかであった。それ以外では、1937年7月にバレンシアとマドリッドで開かれた第二回国際作家会議に出席すること、たとえば、フィリップ・トインビーのように左翼系の政党や団体の代表者として「前線訪問団」の一員として前線に赴くこと、ジャーナリストとして共和国陣営を取材し、プロパガンダに従事すること、またイギリスで「共和国支持」のキャンペーンの一環として講演したり募金活動に専念することくらいであったろう。そうした行動は、1930年代の「作家の行動」という範疇に属するものではなく、ただ単に「共和国支持」と署名することと大差がない。

現実にはスペインの戦場で戦って帰還したG・オーウェルは、1938年4月2日付のS・スペンダー宛の手紙のなかで、次のようにN・キューナードらの行動を批判している。

S I A（国際反ファシスト連合）の発起人委員会が何かそういったものに、あなたと私の名前が入っているのを見ました。ナンシー・キューナードの名前も入っています。あとで本のかたちで（『文士たちは味方する』という題で）出版された例のひとつのものを、かつて私に送ってきたのがほかならぬ彼女なのですからね。私は非常におこった返事を書いて、そのなかで、申しわけなかったのですが、その頃あなたを個人的に知らなかったのも、あなたのことを悪く言ったと思います。しかし、もしS I Aが、こんどのことはすべていかに悪いかを述べる声明に署名するような、ばかげたくだらないことをやるのではなく、食糧やそのほかのものを補給するとか実際に行動するのであれば、私はS I Aの仕事に力を入れるつもりです。⁽³⁵⁾

これこそ、「作家の行動」を自覚し、その通り、実践した者の発言であろう。署名を「作家の行動」と糊塗した、あるいは、署名することで、ある種の充足作用を経験した作家や詩人たちは、1940年代になってことごとく沈黙したのに比して、G・オーウェルのように頑なに絶望を拒否し、果敢な発言を絶やさず旺盛な言論活動ができたのは、このスペイン内戦での原体験によると断言でき

よう。

6 自由のための義勇兵——イギリス人大隊の結成

スペイン不干渉政策のいわば提唱国としてのイギリスは、当然、スペインの両陣営の戦列で戦うことを禁止した。しかも、驚くべきことに、その取り締りに、イギリスの帝国主義的世界戦略の一環として1880年に制定された、民間人が外国軍隊に参加するのを禁止した「外国軍隊兵籍編入禁止法」⁽⁵⁶⁾も適用されたのである。

それにしても、スペイン内戦は政治に目覚めた青年たちに、直接スペインの戦場へ赴くという政治的行為をうながした。

そのもっとも典型的な形態は、おのれの信ずる陣営にくみし、その戦列で戦う義勇兵であった。もちろん、義勇兵といっても、共和国側に加わる場合と、フランコ叛乱軍側に加わる場合とがある。共和国側には、コミンテルン主導の国際旅団、反共産党系の統一マルクス主義労働者党（POUM）の民兵隊、アナキスト系の労働組合である労働国民連合（CNT）の民兵隊の三通りがあった。フランコ側にも、王党派のカルロス党民兵隊「レケテス」（*Requetes*）、外人部隊「テルシオ」（*Tercio*）、ファシスト政党のファランヘ（*Falange*）党民兵隊と三通りあった。

さらに、両陣営の非戦闘員として、さまざまな「医療部隊」救援組織に加わる場合もあれば、ジャーナリストとしてのプロパガンダ要員、前線慰問などの「前線訪問団」としての参加もあった。

国際旅団に入隊したイギリス人義勇兵の人数・年齢・職業・出身階級・所属政党ないし団体については、おおまかにしかわかっていない。1982年に刊行された、イギリス大隊史ともいわれるビル・アレクサンダー（Bill Alexander）の『自由のためのイギリス人義勇兵——スペイン1936-1939年』（*British Volunteers for Liberty: Spain 1936-39*, 1982）⁽⁵⁷⁾によると、義勇兵の総数はおおよそ2000名である。そのうち、戦死・戦病死・行方不明、フランコ軍による処刑などで生還できなかったのが500余名、負傷者は約1200名に達している。戦死者・未帰還者500余名のうち、姓名の判明した者は395名⁽⁵⁸⁾、そのうち共産党員とその青年組織である青年共産主義者同盟員は198名である。

国際旅団に加わったイギリス人義勇兵、正式には第15国際旅団イギリス人大

隊の隊員のうちで、無傷で生還できたのはわずか300余名、総員の15パーセントにすぎない。この数字からみても、彼らのスペインにおける戦いは惨憺たるものであったと想像される。

ところで、どうして国際旅団に入隊したイギリス人義勇兵の数がおよそ2000名といった不確定な数字しか出せないのだろうか。当時、コミンテルンの指令で各国共産党に国際旅団の義勇兵の人数が割り当てられた。イギリス共産党の場合、国内のさまざまな社会的・政治的な難題をかかえ、脆弱ながら党組織の温存も考えねばならず、ごくわずかの幹部クラスを除いては、筋金入りの活動家をスペインへ派遣することができなかった。しかも、戦闘が激しくなるにつれて死傷者が続出したために、イギリス国内で義勇兵の派遣に反対する世論が湧きあがり、コミンテルンの指令通りに義勇兵を派遣するのに四苦八苦していた。未成年者でも、ロンドンのキングス・ストリート3番地にあった共産党の義勇兵派遣事務所である「スペイン人民戦線ロンドン情報事務所」に出頭し、政治的なチェックを受け、それに問題がないと判明すれば、24時間の猶予を与えられただけで、パリのリュ・ド・マテュラン・モロー8番地にあった国際旅団派遣本部、「スペイン人民戦線派遣義勇軍委員会」へと送り込まれた。

たとえば、当時、若手の彫刻家だったジェイソン・ガーニー (Jason Gurney) のスペイン内戦回想録『スペインの十字軍』 (*Crusade in Spain*, 1974) は、こう述べている。

翌朝、ぼくは、小さなスーツケースに若干の荷物を詰めて、キング・ストリートの事務所に出頭した。ぼくが前日に会った最初の8人の男たちは、いまでは15人にふえていた。彼らはすべて、ぼくとほぼ同じくらいの年齢の労働者で、質素ではあったが見苦しくない服装をしていた。彼らの大部分はよそ行きの服、レインコート、ラシャの帽子を身につけていた。われわれはお互いにまったく知り合いでなかったのも、誰もがおし黙っていた。とうとうぼくはビクトリア駅に来てしまった。ぼくだけがパスポートを持っていて、フランス語を話せたので、ぼくはその責任者にさせられた。ぼく以外の連中は、当時パスポートを必要としないパリ往復3日間有効切符で、列車に乗りこんだ。三等のコンパートメント2室の座席についた時は、はだ寒くこぬか雨が降っていた。誰もが自分自身に関して絶望的なほど不安だったので、あまり口数は多くなかった。ぼくらはみな

1914-18年戦争の惨事を聞かされて育ったので、誰ひとりとして自分の将来が幸先よいものとは思っていなかった。⁽⁵⁹⁾

このように急場しのぎに志願者を義勇兵として送り出したために、書類上の記録がかなり杜撰にならざるをえなかったのである。こうした事情は、イギリスだけではなく、義勇兵を派遣したすべての国でほぼ同じであった。

そのほか、個人的にスペインに密入国したり、あるいはジャーナリストや医療部隊員として合法的に入国し、国際旅団やさまざまな民兵隊に加わった者も、意外と多かった。

もっとも、パリのコミンテルン管轄の国際旅団派遣本部では、各国から送られた志願者を再チェックし、スペイン行きの義勇兵の個人データーを管理していた。既に述べたようにわたしがパリで調べたところ、第二次大戦でドイツ軍のバリ制圧直後、この派遣本部は、他の左翼系の政党本都や労働組合本部と同様に、ドイツ軍によって根こそぎ襲われ、重要な資料は灰塵に帰してしまったとのことである。一方、フランコ軍の戦列で戦ったイギリス人義勇兵は正確にはわからないが、わずかに12人くらいであった。しかも、その大半はアイルランド系イギリス人だったといわれている。⁽⁶⁰⁾

《註》

- (1) Gibbs, Jack. *The Spanish Civil War*, Ernest Benn, 1978, p. 54. 邦訳, 『スペイン戦争』川成洋訳, れんが書房新社, 1981年, 75頁。
- (2) Thomas, Hugh. *The Spanish Civil War*. Penguin Books, 1971, p. 185. 邦訳, 『スペイン市民戦争』都築忠七訳, I 巻, 123頁。
- (3) Ibarruri, Dolores. *They Shall Not Pass: The Autobiography of LA PASIONARIA*, International Publisher, 1966, p. 195. 邦訳, 『奴らを通すな!』久保文訳, 同時代社, 1982年, 191頁。
- (4) Thomas. *Ibid.*, p. 186. 邦訳, 前掲訳書, I 巻, 123頁。
- (5) *The Times*, 20 July 1936.
- (6) Tolley, A. T. *The Poetry of the Thirties*, St. Martin's Press, 1975, p. 95.
- (7) Mosley, Sir Oswald. *My Life*, Nelson, 1968, p. 282.
- (8) *Action*, Oct. 1931.
- (9) Mosley. *op. cit.*, p. 287.
- (10) Symons, Julian. *The Thirties: A Dream Revolved*, Faber and Faber, 1975, p. 57. 邦訳, 『彷徨と混迷の時代』中島時哉・川成洋訳, 朝日出版社, 1977年, 75頁。
- (11) Skidelsky, R. *Oswald Mosley*. Greenhill Books, 1975, p. 331.
- (12) 村岡健次・木畑洋一編 『イギリス史: (3巻・近現代史)』, 山川出版社, 1991年, 302頁。

- (13) Newton, K. *The Sociology of British Communism*, Secker & Warburg, 1969, p. 159.
- (14) Lewis, John. *The Left Book Club: An Historical Record*, Victor Gollanz, 1970. p. 7. 邦訳, 『出版と読書——レフト・ブック・クラブの歴史』 鈴木建三訳, 晶文社, 1991年, 16頁。
- (15) Orwell, George. *Coming up for Air*, Penguin Books, 1963, pp. 147-8.
- (16) Watkins, K. W. *Britain Divided: the Effect of the Spanish Civil War on British Political Opinion*, Edinburgh, 1969, p. vii.
- (17) 川成洋 『幻のオリンピック』 筑摩書房, 1992年。
- (18) 川成洋 「聖火リレーに隠されたもの」 『毎日新聞』 1998年1月20日夕刊。
- (19) アルバート・E・カーン編 『パブロ・カザルス 喜びと悲しみ』 吉田秀和・郷司敬吾訳, 朝日新聞社, 1991年, 194頁。
- (20) 川成洋 「血の惨劇は避けられないバルセロナ平和の祭典」 『サンサーラ』 1992年8月, 178-186頁。
- (21) ソバーニャ・小林一宏 「スペイン内戦と列強」 桂書房, 1967年, 212-216頁。
- (22) 川成洋 前掲書, 92頁。
- (23) 川成洋 前掲書, 109頁。
- (24) 川成洋 「バルセロナ・オリンピック異聞」 『春秋』 1992年10月, 6-10頁。
- (25) バルセロナの正規軍の武装蜂起, 自然発生的な義勇軍の編制, 叛乱軍の鎮圧などをつぶさに目撃したウイントリンガムは, 第一次大戦に西部戦線に従軍したこともあって「トム・マン＝セントウリア」の軍事教官に就任した。
なお, ウイントリンガムの証言を補強するものとして, 以下の本が挙げられる。
Nassaes, José Luis Alcofar. *Spansky: Los exfranjeses que lucharon en la Guerra Civil Espanola*, Dopesa, 1973, p. 16.
Jonston, Verle. *Legions of Blood: The International Brigades in the Spanish Civil War*, The Pennsylvania State University Press, 1969, p. 28.
Rust, William. *Britons in Spain*, Lawrence & Wishart, 1939, p. 4.
Castells, Andreu. *Las Brigadas Internacionales de la guerra de Espana*, Ed. Ariel, 1974, pp. 21-3.
- (26) Romilly, Esmond. *Boadilla: A Personal Account of a Battle in Spain*, Hamish Hamilton, 1937. 邦訳, 『ぼくはスペインで戦った』 橋口稔訳, 平凡社, 1974年。
- (27) Sommerfield, John. *Volunteer in Spain*, Lawrence & Wishart, 1937. 邦訳, 『スペインの義勇兵』 川成洋訳, 彩流社, 1981年。
- (28) Madariaga, Salvador de. *Spain*, Jonathan Cape, 1942.
- (29) Casado, S. Colonel. *The Last Days of Madrid*, Peter Davis, 1939.
- (30) Alberti, Rafael. *Homenaje de despedida a las Brigadas Internacionales*, Ed. Signo, 1938, p. 9. 邦訳, T・バミエス 『子供たちのスペイン戦争』 川成洋・関哲行訳, れんが書房新社, 1986年, 64-65頁。
- (31) Pàmies, Teresa. *Los ninos de la guerra*, Ed. Bruguera, 1977, p. 81. 邦訳, 前掲訳書, 66頁。
- (32) *Avui*, 15 de enero de 1977. 邦訳, 前掲訳書, 66頁。
- (33) Wintringham, Tom. *English Captain*, Faber & Faber, 1939, p. 327. 邦訳, 『スペイン国際旅団——イギリス人大隊長従軍記』 川成洋・大西哲訳, 彩流社, 1989年, 250-251頁。

- (34) 石垣綾子『オリーブの墓標——スペイン戦争と一人の日本人』立風書房、1970年。
川成洋『スペイン戦争——ジャック白井と国際旅団』朝日新聞社、1989年。
- (35) Cabeza, Manuel Rubio. *Diccionario de Guerra Civil Espanala*, Ed. Planeta, 1987. pp. 137-9.
- (36) Jackson, Gabriel. *A Concise History of the Spanish Civil War*, Thames and Hudson, 1974, p. 37. 邦訳、『スペイン内戦』斉藤孝監修、宮下嶺夫訳、彩流社、1986年、58頁。
- (37) Thomas. op. cit., p. 281. 邦訳、前掲訳書、I巻、187頁。
- (38) シャン・ブランデル『スペインへ武器を』吉田八重子訳、鹿砦社、1974年、92頁。
- (39) Thomas. op. cit., p. 279. 邦訳、前掲訳書、I巻、190頁。
- (40) 斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社、1979年、49頁。
- (41) Symons. op. cit., p. 107-8. 邦訳、前掲訳書、164頁。
- (42) Spender, Stepher. *World Within World: The Autobiography of Stephen Spender*, Faber and Faber, p. 201.
- (43) Cunningham, Valentine. ed. *The Penguin Book of Spanish Civil War Verse*, Penguin Books, 1980, p. 374. 邦訳、J・クラークほか『危機と文化——30年代のイギリス』久津木俊樹ほか訳、三友社出版、1989年、122頁。
- (44) Ibid., p. 378. 邦訳、前掲訳書、122頁。
- (45) Ibid., p. 130. 邦訳、前掲訳書、123頁。
- (46) Atholl, Duchess of. *Searchlight on Spain*, Penguin Books, 1938.
- (47) *Authors Take Sides on the Spanish War*. 但し、このパンフレットには頁数は付けられていない。

このアンケートを出した1ヵ月後に、N・キューナードは146通におよぶ回答を編集し、ロンドンの3つの出版社に依頼したが断られ、ようやく *The Left Review* の編集者 R・スウィングラーが出版を引き受け、若干の共和派の見解と、「締切り後の重大ニュース、極秘扱いではない」という見出しが付けられた G・B・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の期待はずれの次のような見解、さらに著名な共産国支持者の名簿を載せ、『文士たちは味方する』と題するパンフレットにして、バリで3000部発行し、1部6ペンスで販売した。

「スペインでは、右翼の叛乱より以前に、右翼と左翼がともにこの国を支配しようとして次々にみずからを完膚なきまで貶めたために、そのどちらがより不適任かと決めるのは不可能である。スペインみずからが選択しなくてはならない。それは現実には、われわれのやるべき仕事ではない。もちろん、わが資本主義の政府はフランコ将軍を援助するために、可能なかぎりあらゆることをやっている。私は共産黨員なので、概して左翼の味方である。しかしながら、そのためにイギリスの政党政治を支持できないし、イギリスの模倣であるヨーロッパの政治機構についても、全く評価していない。

現在、資本主義の列強は、将軍側への極めて活発な干渉を意味している、いわゆる不干渉なるもので、将軍に勝利をもたらせようとしているようである。だが、最終的な勝利を将軍側が握るとは思えない。それまで、私はそのことについて沈黙しようと思う。」

- (48) この雑誌には、Tristan Tzara, Langston Hughes, Cedric Dover, Rafael Alberti,

W. H. Auden, Nicolas Guillén, Brian Howard, Randall Swingler, Pablo Neruda, Raúl Tuñón などのスペイン内戦に関する詩が掲載されている。cf. Ford, H. D. *A Poet's War: British Poets and the Spanish Civil War*, University of Pennsylvania Press, 1965, p. 279.

- (49) キューナード自身のスペイン内戦に関する詩は、*New Statesman and Nation*, *Voice of Spain*, *Life and Letter To-day*, *Left Review* などに掲載されている。彼女のエッセイや記事、ことに1939年に書かれた共和国の終末を綴ったエッセイなどは、*The Manchester Guardian* に掲載されている。また彼女は文学的な活動以外に、南フランスでのスペイン人避難民の援助と救済、亡命した共和派の人びとの援助と彼らの主張のプロパガンダなどに、多くの資金と時間を費やした。cf. Ford, H. D. op. cit.

なお、アン・チザムの「ナンシー・キューナード——疾走する美神」（野中邦子訳、河出書房新社、1993年）の「エピローグ」は、こう結んでいる。「イギリスの友人や親類には、イギリス領事館を通じてナンシーの死が知らされた。パリのイギリス大使館の礼拝堂で3月24日にささやかな葬儀が営まれた。（中略）ナンシーが死んでしばらくのあいだ、フランスやイギリスやアメリカの友人たちのもとに、とりとめのないことを書き散らしたナンシー最後の手紙や葉書が舞いこんだ」

- (50) Sperber, Murray, ed. *And I Remember Spain: A Spanish Civil War Anthology*, Hart-Davis, MacGibbon, p. 203.

- (51) ジェイムズ・ジョイスは、N・キューナードに、「私はジェイムズ・ジョイスです。あなたのアンケートを受け取りました」と電話した。彼女が、それに回答する意志があるかどうか尋ねると、彼は憤慨して次のように言った。

「いや、駄目です。それは政治的ですので、私は答えるつもりはないのです。今や、政治が全ての事柄に入り込んできています。先日の晩も、ペンクラブの夕食会に出席を余儀なくされました。ペンクラブの会則には、政治的な事柄は決して議論してはならないとあります。ですが、何が起こったと思いますか？ ある人がある立場から政治的なスピーチをして、別な人がそれに対立する議論を展開し、もう一人の別な人が、さらに政治的な論文を発表したのです。私は、ペンクラブがアメリカでの『ユリシーズ』への著作権侵害に関心を払ってくれると期待していたのです。しかし、そのことは無視されました。ペンクラブはとくに政治的だったのです」

- (52) Sperber. op. cit., p. 204.

- (53) Ibid., p. 206.

- (54) Ibid., p. 207.

- (55) Orwell, Sonia & Angus, Ian. eds., op. cit. vol. 1., p. 312. 邦訳、前掲訳書、I巻、287頁。

- (56) Ford. op. cit., p. 66.

- (57) Alexander, Bill. *British Volunteers for Liberty: Spain 1936–39*, Lawrence & Wishart, 1982.

- (58) Ibid., pp. 263–76.

William, Colin. Alexander, Bill. Gorman, John. *Memorials of the Spanish Civil War: The Official Publication of the International Brigade Association*, Alan Sutton Publishing, 1996, pp. 144–55.

- (59) Gurney, Jason. *Crusade in Spain*, Faber & Faber, 1974, pp. 38–9. 邦訳、『スベ

ンの十字軍」大西洋三・川成洋訳，東邦出版社，1977年，44頁。

- (60) アイルランドから，フランコ叛乱軍の戦列に参加した義勇兵部隊がいた。イオーイン・オウダフィ（Eoin O'Duffy）指揮の600名の部隊であった。オウダフィは，アイルランドのファシスト運動「背シャツ隊」の指導者であり，スペインで軍功をたてれば，アイルランドにおける彼自身の政治的立場が高まるものと目論んでいた。だが，彼のスペイン内戦回想録 *Crusade in Spain*（Brown & Nolan, 1938）のなかでの武勇伝まがいの報告にもかかわらず，実際はたいした成果をあげられず，フランコ側からも実戦面では期待されることもなかった。結局，彼らは兵力というより，フランコ軍の士気の高揚のためだった（cf. Jackson, Gabriel. *The Spanish Republic and the Civil War 1931–1939*, Princeton U. P., 1972, p. 89）と考えられている。